Personality

「正しいこと」を積み重ね、人を育てながら「違う景色が見える会社」を目指していく

株式会社クラフティア
代表取締役社長執行役員
石橋和幸氏

（いしばし・かずゆき）
1959年佐賀県生まれ。82年中央大学理工学部卒業後、九州電気工事株式会社（現・クラフティア）に入社。人事労務部長、北九州支店長、営業本部長、副社長などを歴任。2023年より現職。九州電気工事は1989年12月に九電工に社名を変更。さらに2025年10月に創業80周年を機に「クラフティア」へ変更。主力である配電・電気・空調衛生工事に加え、再生可能エネルギー、不動産、投資事業など新たな分野にも取り組み、次の100周年に向けた企業変革を推進している。

読み返すたびに、人生の見え方が変わる

子どもの頃は、いわゆる文学少年ではありませんでした。サッカーなど外で遊ぶほうが好きで、夏休みの読書感想文があるので読まないといけないから読む。そんな感覚でした。意識して読書するようになったのは、中学・高校以降でしょうか。社会人になると、さらに読む量が増えました。東京勤務の30代の頃は、「寝る前の30分は必ず読む」と決めていたんです。お酒を飲んで帰ってきても読む。通勤電車でも読んでいましたし、あの頃はかなり意欲的でしたね（笑）。

当時読んでいたのは、ビジネス書などが中心でした。仕事にどう役立てるか、自分をどう成長させるか。そういう知識を求めていたのだと思います。それが40代、50代となるにつれ、読む本も変わってきました。哲学や宗教、歴史、人の生き方のようなものへ関心が広がっていったのです。

時々で感銘を受けた本は変わるのですが、中でも印象に残るのが『言志四録』です。江戸時代の儒学者・佐藤一斎が著したもので、20年ほど前、課長になったばかりの頃、ある経営者から勧められました。人としてどう生きるか。正しいこととは何か。自らの姿勢に通じることが書かれていて、今でも時折読み返しています。

面白いのは同じ本でも年齢によって感じ方が変わること。当時と今では立場も違うし悩みも違う。当然心に残る言葉も変わる。若い頃に気づかなかったことが、この年齢になってはじめて腑に落ちることもあります。それが読書の面白さだと思うんです。

ほかにも、白洲次郎や池波正太郎といった人物に関する本も印象に残っています。「格好いい生き方」というのでしょうか。若い頃はそこまで意識しませんでしたが、自分が人生の後半に差しかかる年齢になると、晩年をどう生きるかも考えるようになります。

昔から、人としてどう生きるかには関心がありました。知識を増やすだけではなく、感性や価値観も広げていく。その意味で、ジャンルは関係なく、本は大切な存在だと感じています。

> **石橋社長が時折読み返す自らの姿勢を見直す1冊**
>
> **『言志四録』（全4巻）**
> 佐藤一斎 著（講談社学術文庫）
>
> 江戸時代後期の儒学者・佐藤一斎による思想書。人としての生き方や、為政者・経営者としての姿勢が説かれている。変革期における人間の生き方に関する問題意識で貫かれた語録集で、幕末から明治にかけて多くの人々に影響を与えた。

「人」がすべて 次の時代へ向けた変革

当社は創業80周年を迎えた2025年10月を機に、「九電工」から「クラフティア」へ社名変更しました。理由の一つは、社名と事業内容が合わなくなってきたことです。九州以外の地域の仕事も増え、電気工事だけでなく空調・衛生工事の比率も高まっている。さらに再生可能エネルギーや不動産、投資事業など、従来の枠を超えた事業も広がっています。その変化の象徴として、「今と違った景色を見る会社になろう」と呼びかけ、中堅・若手社員を中心に議論を重ねて生まれたのが「クラフティア」という社名です。

結果として、社内の雰囲気もかなり変わりました。社員自身が「こんな事業までやっているんだ」と改めて認識し、前向きな空気が強くなったように感じています。

私は経営者として、「人がすべて」だと思っています。結局、どんな事業も最後は人です。よい人財を採用し、どう育成するか。ですから、自分の時間の3分の1は育成に使うと決めています。研修施設にもできるだけ足を運び、若手や技能系社員と直接対話する。現場の声は、私にとって最も大切な一次情報となっています。

トップに必要な資質はいろいろあるでしょう。先見性、判断力、明るさ、前向きさ……。ただ、中でも最も大事なのは「正しいことをする」ことだと思っています。

利益はもちろん必要です。しかし、利益のためだけに働く会社であってはいけない。社会課題の解決につながるなど、社員自身が「世の中の役に立っている」と実感できる会社であることが大切です。例えば、比率は下がりつつありますが、配電工事は当社の原点です。携わる社員は、災害時に自宅が被災していても復旧に赴く。まさに当社の誇りある部門です。そのうえで電気があり、空調があり、新しく再エネ事業や投資事業も加わり、従来のサブコンの枠を超えた企業へと変化しようとしているのが当社の現状です。

皆が誇りを持ち、そして今とは違った景色を見られる会社になるためには、社員一人ひとりが当事者意識を持ち、自分の言葉で考え、行動できる組織をつくらなければなりません。その中での私の役割は、皆のモチベーションを上げること。そして、いかに育成するか。

日々に新たなり——私が大切にしている言葉ですが、昨日より今日、今日より明日。その積み重ねで、人も会社も毎日少しずつでも成長していければと思います。【談】

スマートカジュアルを推進する同社。目的は、社員の「自立性」や「働きやすさ」のさらなる向上等を図り、活力ある組織風土を醸成することにある